



ささしま開発コンペで、愛大案採用

愛知大学の名古屋キャンパスが、2012年4月に名古屋駅近くの「ささしまライブ24地区」に開校します。1946年に豊橋でスタートして以来、名古屋進出は懸案でした。車道、三好にキャンパスを開設しましたが、手狭さや、交通の利便性で問題がありました。

そこへ名古屋市の「ささしまライブ24地区」の再開発構想が持ち上がったのです。「名古屋経済圏」を世界に開かれた文化・産業の拠点にしようという「グレーター・ナゴヤ・イニシアティブ」の一環として、名古屋市は「国際歓迎・交流拠点」と「にぎわいのある複合型のまちづくり」をコンセプトに、ささしま地区の再開発に乗り出し参加事業者のコンペを行うことになりました。

国際化、地域貢献は、愛知大学の建学の精神でもあり、名古屋市のコンセプトと一致します。2007年、コンペに参加し、2008年に採用を決めていただきました。これが、新名古屋キャンパス建設までの経緯です。

大学は、都心に何をもたらすか

「ささしまライブ24地区」に進出して、われわれは何をするのか。愛知大学には現代中国学部と国際コミュニケーション学部があります。特に学部として現代中国に関する研究と教育を行っているのは、日本で愛知大学だけです。この地域の国際化を担う人材を育成し、国際化の表玄関にふさわしい人材教育の拠点にしていきたい。

にぎわいづくりに関して言えば、学生が1年を通して駅前地区で学んだり活動したりするようになる。それから、ささしま地区にはJICAが、ひと足先に移転しています。豊田通商など4社連合の超高層ビルもできる。中京テレビの移転計画もあります。こういうところと連携して、まちづくりやにぎわいづくりに取り組んでいきたい。JICAとの間では、すでに実績もあります。

都心は、大学をどう変えるか

私は、大学というのは社会的存在だと考えています。大学には、研究と教育という役割がある。しかしこれからは、第3の役割として社会貢献を重視すべきです。研究や教育も社会から評価されて意味を持つ。そういう時代になっています。

世界に開かれた名古屋へ 都市と大学が コラボレーション



愛知大学
理事長・学長
佐藤元彦さん

さとう もとひこ / 1958年生まれ。慶応義塾大学経済学部卒業。広島大学大学院社会科学研究科博士課程単位取得退学。特殊法人日本学術振興会特別研究員、愛知大学経済学部教授、経済学部長・理事などを経て2008年8月から現職。



愛知大学の名古屋キャンパス完成予想図(イメージ)
※高層棟は2015年完成予定

大学にとってこの地区で学ぶ意義は、社会貢献の意味を、世界に開かれた現場の中で考えるということです。キャンパスライフは、キャンパスの中だけにあるのではない。キャンパスの外との関係、社会と触れ合う現場が大切です。そこは大学による社会貢献の実験場でもあります。

だから学生には地域の活動に積極的に参加させたい。また地域の人に大学の取り組みが見えるようにしていきたい。学生には、これからささしま地区がどう変わって行くかを現場でみて、そこで自分たちがどう貢献できるかを考えてほしいと伝えています。

乗り換え地点でなく訪れたい駅前

私は青森出身で、名古屋のことはよく知らなかった。最初に名古屋に来たときは、同規模の他都市と比べ、正直、これが駅前?(笑)という感じでした。都心の顔としては都市機能の集積が弱く、印象が薄いですね。駅前に来る目的があまりないので、むしろ乗り換え地点という利用の仕方でした。

都市を語るとき、東京が長男、大阪が次男、名古屋が三男という言い方があります。しかし、もうそんな時代ではない。グレーター・ナゴヤとして、世界に開かれた名古屋、世界から評価される名古屋にならなきゃいけない。名古屋が直接世界と向き合う、そういうまちづくりを進めるべきです。「ささしまライブ24地区」は、その表玄関なのです。

名古屋には東海地区唯一の国連機関「国連地域開発センター」もあります。これは国連と日本との協定で設置された、途上国の地域づくりのセンターです。こういう組織と連携していくのもグレーター・ナゴヤの使命ではないでしょうか。名古屋都市センターには、そういう名古屋のまちづくりに積極的に関わっていただきたいですね。